
Such is life

宋太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Such is life

【NZコード】

NZ537V

【作者名】

宋太

【あらすじ】

科学が発達した現代であっても、不思議なことというものは多々ある。未確認生物や科学では解明できないもの。そして、人には気づかれていない、異世界からの侵略。

界夷と呼ばれる侵略者は、常に日常に潜んでいる。日常を壊された人間たちは界夷に復讐するために力を振るう。

逃げる

みあは、たぶん生まれて初めてといつてもいいくらい長い距離を、全力で走っていた。

実際はみあがそう思つてゐるだけかもしないが、確実に言える事は、みあがすでに十分近くは逃げ続けている事だ。

（こんなはずじゃ、なかつたのに……）

みあは悔しそうに、唇をかみ締めた。

今日はせっかくの休日。ちょっと遠出だつたが、電車で一時間かけて渋谷にやつて來た。いろいろなお店をウインドウショッピングして、小さい花柄があしらわれた、可愛い夏服のワンピースを買つた。

初夏が始まつたばかりだといつのに今日はとても暑かつた。

歩いている途中で大人な雰囲気を漂わせてゐる和風喫茶を見つけてみあはることにし、そこでキンキンに冷えたガラスの器に、黒蜜たつぷりのアイスクリームあんみつを食べた。

彼女は他の女子高生と比べると、可愛い部類に入る。そう断言できるくらい、クラスの男子に人氣があつた。

自分の事をみあと呼ぶが、本当の名前は小森美奈。小さい頃から、少し下つ足らずの話し方が抜けない。それが可愛い、とクラスの男子が言つので、みなはみあと自分を呼ぶ。

ウェーブのかかったショートの髪は紅茶味のキャンディみたい。ぱっちりとした二重はつけ睫毛を施し、アイラインで強調される。薄い化粧にさくらんぼ色の唇はふるんとしていて、みあのすべてが甘いお菓子みたいで美味しそうに見えた。

いっぱい遊んで大満足したみあは、帰りの電車で笑みが止まらなかつた。そんな、幸せいっぱいの笑顔に、乗り合わせた向かいの座

席の端に座っていたサラリーマンのおじさんが困惑ったように顔を赤くしていた。

みあは電車のドアにもたれかかり、窓越しに顔を赤くしたおじさんと視線があった。さらに、につこり笑うとおじさんはあたふたと視線を彷徨わせた。その様子に、みあは笑みを深くした。

今日はいい一日だった。鼻歌を歌いたくなるような高揚感で家の最寄り駅を降り、暗くなっている空に、星でも見えないかと見上げながらの帰宅途中。それに遭遇した。

最初、みあは自分の耳に入ってきた音を、そして気にも留めなつた。

わくわくした心が先だつて、音が脳に届く前にかき消してしまつていた、と言つた方が正しいかもしない。

じゅるじゅる、という音がはつきり聞こえてきたのは、ブロック塀で囲まれた住宅街の角を曲がつた時だった。

「なに？」

立ち止まり、左手に持つていた、籠のバッグとブランドロゴの入った紙袋の取つ手を握りしめた。

不意に、自分がこんなに暗い場所を歩いていたつけ？ と、疑問と一緒に恐怖が沸き起つた。

一つの疑問が生じると、次々と可笑しなことに気が付いた。

どうして、変な音がするんだろう。

どうして、生活音が何一つしないんだろう。

車の走行音を最後に聞いたのはいつだっけ？

みあは湯水のように湧きあがつてくる恐怖から、自分を守りつとするかのように、バッグと紙袋を胸の前で抱きしめた。

「へ、平氣だもん。みあのおうちはすぐそこだもん」

自分に言い聞かせるように、小声で言つた。その声は、直ぐに夜空に消えてしまった。

今日は渋谷に行ったから、ファッショ nに気合を入れた。グラデイエーターサンダルに、フリルつきのショートパンツ。シックな襟

付きTシャツに腕には幾つもの細い腕輪をつけ、赤いリボンがつけられているカンカン帽を被っている。可愛いけれど、少し大人っぽさを演出してみた。

みあは自分の恰好を思い出して、はつとした。

もし、すぐそばにいるのが変態だつたらどうしよう。

みあは可愛いから、襲われるかもしない。そう思いいたつた瞬間。変態に引きずり込まれてしまつ自分を想像してしまい身体がかつと熱くなつた。

みあは男の子の友達の方が多い。どういう訳だか、クラスの女の子はあまりみあと遊んでくれない。それはきっと、男の子がみあを可愛いって褒めてくれるからだと、みあは確信している。

みあが可愛いのは当然のことなのに、どうしてそんなことを一々気にするんだらう?

みあにとつて、女の子は謎だ。

(みあは怖がりじや、ないもん……)

きゅっと愛らしく唇を噛んで、みあはそのまま真直ぐ歩き出す。頭の中には、変態にあつたらどうこう田にあつてしまふんだらう。と、不安と禁忌の甘い誘惑が駆け巡つた。

腕を掴まれて、お気に入りのTシャツをいきなり破かれてしまつんだろうか。

それとも、ショートパンツを脱がされてしまう?

みあの心臓がどきどきするたぐ脈打つた。

もう少し、あとほんの四メートル先の角の向こう側が、何かを囁くような音の発生源だ。

みあは乾いた喉をぐくりと鳴らし、一步ずつ慎重に、やつと、なるべくそっと足音をたてないようにして、近づいていく。

(一体、何をするする言つているのう?)

好奇心が疼く。ほかほかと熱くなつていく体を自覚しながら、みあは建物の角に立つた。

そうつと、音のする方へ顔を覗かせた。

四、五メートル先に何かが蠢いている。

ちょうど、みあのすぐ側にある電柱と標識の柱が邪魔で、誰かが蹲つているようしか見得なかつたせいで、始めは何か、分からなかつた。

自分の思い通りに行かないと直ぐに、爪を噛んでイライラしだす癖があるみあは、この時もせつかくのマニキュアとストーンできれいに飾られている付け爪を、白くて小さい歯で噛んだ。

正体が知りたくて、少しの間、息を殺して窺つていた。

蹲つている人影は背後をみあに向けていたが、時折動く頭が一度持ち上がり、短い髪が見えた。色は分からぬがズボンを履いている。

恐らく男だろうとみあは当たりをつけたみあは、にんまり笑つて、何の気負いもなく建物の角から出た。

男ならもし何かあつても、可愛いみあをいじめたりはしないだろうという打算があつたからだ。

それが、みあの誤算だった。

「あのう。こんばんわあ。なにしているんですかあ？　みあ、気になつちやつて、来ちゃいましたあ」

えへ、と軽く舌を出してはにかむように相手に笑いかけた。すると蹲つていた男は、何かを止めた。それと同時に、啜るような音が消える。

「あのお……」

「…………」

みあの声に、男は対した反応を見せず、じつと蹲つているまだ。

「…………お返事できないんですかあ？」

「…………」

男は反応を返さない。

みあは可愛らしくため息を一つ吐いた。

可愛いみあに何の反応も見せない男に、彼女はさつさと見切りをつけたのだ。

「……もしかしてえ、具合が悪かったりするんですかあ？　だつたらあ、みあ、誰か人にお願いしてきますけどお？」

みあの可愛さを分からぬ男とこれ以上話す必要もない。

さつきまでの興奮は一瞬で冷え、白けた感情が胸中を占めた。が、どこに人の目があるか分からぬ。みあは念のため、小首を傾げて、可愛らしくもう一度だけ声をかけた。

「……」

男は答えない。

「もうー！　みあ、もう行つちやつから。止めつたて、遅いんだからねー！」

べーだ、と舌を出す。それも、みあが一番かわいく見える様に。ふんふん、と口で怒りながら、踵を返して帰るふとした時だつた。何かが落ちる音がした。みあは音に反応するよつて、視線を向けてた。

ゆつくりと蹲つていた男が、立ち上がりつとしている。その時に何かを落としたのだ。

みあは首を傾げた。

なんだか分からぬが、落としたものは大層大きいものに見えた。男は立ち上がり、そして、みあの方へ酔つ払いの様な千鳥足で近づいてきた。ちょうど、みあと男の距離が一・五メートルくらいの距離になつた。

二人の間には、チカチカと切れかかつた外灯が一本立つてゐる。

「あのう。なんですかあ？」

みあはここによつやく、相手が得体のしれないものではないどうか、という考えが出てきた。

一步後ずさり、止まつていた恐怖が決壊して溢れ出てきた。

「ちょ、ちょつとお。みあ、おまわりさん呼びますよお？」

男はみあの言葉を聞かず、一歩ずつ近づいてくる。

「……ひつー！」

外灯に照らされた男を見た瞬間、みあの喉は引きつけを起こした

よう震えた。

「あ、あああ……」

普段の彼女の声とは似ても似つかない、老婆の様なしわがれた声を出して後ずさる。

みあは見てしまった。

男は、確かに男だった。しかし、みあの知っている人間の男とは大分違う。

目は毛細血管が破裂したのか、真っ赤に染まり、皮膚は血の気がなくぼろぼろ。服はワイシャツにスラックスというサラリーマンの姿だったが、ところどころ切れ、まるでゾンビに見えた。

なにより、みあを驚かせたのは、半開きの口から一本だけよく見える、光沢のある真珠色の尖った犬歯。それと、口の周りの黒くないかけた赤い色。

後ずさりながら、みあの視線がこの男の落とした物体に向かつた。

「うそつ！」

無意識に発生した言葉だった。

外灯の明かりからは一メートルほど離れていたが、夏に差し掛かろうとしているこの時期。きらめく様な月明かりと、夜空は昼の光を吸収しているのか、まだほんのりと明るさが残っているおかげで、薄暗いがシルエットが判別できた。

それは、みあには人に見えた。目を凝らすともっとよく見える。スカートをはいているのが見えた。女性のようだ。足は左右とも膝からくの字に曲がっている。髪が縦横無尽に顔に掛け、どんな表情をしているかは分からなかつた。ただ、力なく投げ出された腕が嫌に白く見えた。

「な、なんでその人倒れてるの？」

怯えが言葉を震わせる。涙が目元に溜まつてくるのが分かる。みあは何かを否定したいのか、緩く何度も首を振り、近づいてくる男にもう一度視線を戻した。

男の姿をした化け物は笑うことも怒る事もない。ただ、赤く染まつ

た目は視点があわないのか、ゆらゆらと左右に揺れ、ゆっくりとだだ、近づいてくるだけだった。

「い、来ないでよお……」

みあは力なく言い、後ろに下がる事しかできない。化け物がみあに手を伸ばした。次の瞬間、みあの中に蓄積された恐怖が一気に全身を駆け巡った。

「い、いやああああ！」

持っていた荷物を化け物に投げつけ、みあは踵を返して走りだした。

男は投げつけられた荷物から自身をかばうような仕草は一切せず、逃げていく彼女を赤眼で追いかける。

じつとしていた。ただ、じつとそこに立ち、男は遠ざかっていく彼女を合わない視線で見ていた。

男は空腹だった。先ほど何かを口に入れた覚えはあるのに、まだ減っている。まるで、永遠に続くような飢餓感が絶えず、男を襲っていた。

一体、いつから腹が空いているのか？

男の記憶にはその問いに対する答えが思い浮かぶことはなかつた。飢えを満たしたい。それだけが、男を動かす気持だった。ふと、一度だけ赤い目が彼女の姿をはつきりと捉えた。

アレハ、タベモノダ……。

本能が教えてくれた答えに、男は歓喜の咆哮を上げる。こんな所に、空腹を満たすものがあつたなんて、と。

男にとつて、今いる場所はどうでもよかつた。

閑静な住宅街の筈なのに、人の出す様々な音が聞こえることもなく。虫も鳴いていない。自転車で通るおじさんもいなければ、犬を散歩させるおばさんもない。それらすべて、男にとつてどうでも良いことだった。

何よりも、食事が先だ。

男はもう一度。今度は唸り声から咆哮し、食べ物を追いかける

とにした。

虚ろだつた赤眼に爛々と光がともり、男は駆け出した。

男が走り去つてから、数秒後。みあが覗いていた角の塀に囲まれている家の屋根から、人影が一つ下りてきた。

詳しく述べば、一つの人影にもう一つの人影が米俵のように持ち上げられて下りてきた。

米俵の人影が担いでいた人影の肩から降ろされる。

担がれていた人間は片手に長細い棒の様なものを持つていた。それを倒れている女に近づき、胸の辺りに突き刺した。

女は刺されたショックで全身を跳ね上げ、四肢を痙攣させたと思つたら、段々と縮みだした。一秒後には、二十センチ位の顔のない人形になつてしまつた。

突き刺した人影が、腰を屈め人形を回収する。

その間、もう一人はずつと化け物が走つて行つた方向を見ていた。回収した人形を懐に収めた人影が、もう一人に近付く。そして二人は、同時にため息を付いた。

逃げる2

「な、なんですよ」「涙が頬から幾筋も零れ落ちる。気合を入れたメイクが汗と涙でぐちゃぐちゃだ。

せつかくの楽しい休日の筈だったのに。みあは口を開けて呼吸をする。こんなにも真剣に走ったことは今まで無かつた。

胸が痛い。心臓が今にも破裂しそうだ。みあは足を止めたくなつた。でも、出来ない。

いくらみあでも、化け物とお友達にはなりたくない。

荒い息遣い。我武者羅に走り、みあは自分が今どこにいるのかが分からなかつた。

どこかに隠れる場所はないだろうか？

そうは言つても、辺りは住宅街。家と塀と電柱とゴミ捨て場くらいしかない。

どこの家に逃げ込もうかとも思つたが、チャイムを鳴らし、家人が出てくる合間に捕まつてしまつたら。そう考えたら、怖くて立ち止まれない。

足がもつれる。咄嗟にみあは短い悲鳴を上げるも、何とか態勢を立て直せた。

もう無理だ。絶望とあきらめがない交ぜになつて、みあの心に沁みこんできたとき、家と家の間に小さな森が見えた。

そこなら隠れられるかもしれない、と彼女は一筋の希望を見つけた。

しかし、森だと思つていたそこは、周りを木々で囲まれた公園だった。

隠れられる場所はあるだろうか？

一瞬、不安になつたが、みあはもうこれ以上走れなかつた。

足はがくがくして、太ももは熱をもつたように熱い。これ以上走れば、きっとみあの心臓が破裂して死んでしまう。

藁にも縋る思いで、みあは公園の中へと駆け込んだ。

ベンキの剥げた遊具が寂しそうに点在している。

ブランコに滑り台、鉄棒。中央付近にかまくらのようなオブジェ。鉄網のゴミ箱にはペットボトルが一本入っているだけだった。

外灯のすぐ近くにベンチが並び、手入れをされている植込みが花を受け、園内の周りを飾っている。さらにその周りに背の高い木が並んでいる。みあにはその、のっぽの木々が森に見えたのだ。ふらふらする体を叱咤しながら、みあは公園の中央辺りまで歩いた。隠れる場所がかまくらしか思いつかなかつたからだ。

危なげな足取りで、少しづつ前に進む。
もう、歩けない。

そう思つた瞬間、足が縛れた。

「きや！」

今度は持ち直す事が出来ず、重力に従つて地面に倒れこんだ。その拍子に、カンカン帽が頭から落ち、両腕で顔を庇つたが、右の人差指の付け爪が剥がれた。

「いたつ……」

膝と爪から鈍い痛みが起きた。みあの瞳から新たな涙が零れる。
「も。なんでもみあが、こんな目に合わなくちゃいけないの
足の裏が痛くて熱い。

目の前には、かまくらのオブジェが、あとほんの数メートル先にある。それでも、みあには長くて歩けない距離だつた。

みあは泣きごとを漏らしながらも、上半身をなんとか起こして振り返つた。

追いつかれたら、と不安になつたからだ。

乱れた呼吸の中で、化け物の気配がないか探る。

不思議な事に、化け物の存在は一切感じられなかつた。みあの目には煌々と輝く外灯に集まる虫や、星が遠くに見える夜空。それに、

公園の向こうにある、家の明かりしか見えなかつた。

「いなく、なつたの？」

どこか、茫然とした咳きだつた。

暫く、辺りを見回しても、化け物の姿は一向に見えない。みあの中に次第に怒りが湧いてきた。

可愛いみあをこんなに走らせておいて、追っかけても来ないなんて、意氣地のない化け物だ、と。

呼吸が落ち着いたみあは頬を膨らませ、上半身を元に戻し、両腕に力を入れて立ち上がるうとした。その時、ふわっと生臭い匂いがした。

みあは何気ない、いや、何の疑問も持たずにその臭いの元を探した。

元は直ぐに見つかつた。うつ伏せの恰好で、腕だけで上半身を支えて、みあは右を向く。彼女の右側の方向。数メートル先のベンチに誰かが俯いて座つている。

さつきまで、誰もいなかつたはずなのに。

みあは器用に首を傾げた。

座つている者はちょうど外灯の光が当たらない場所にいた。暗闇の中、俯いていた顔がゆっくりと起きる。

彼女は息を飲んだ。

その者の目は赤かつた。

「あ、ああ……」

か細い悲鳴。

座つていた者が、足を踏みしめて立ち上がり、一歩、また一步と近づいてくる。

みあは動けなかつた。

小さく綺麗な白い歯がカチカチと鳴り、腕の力が抜けて、顎から地面に落ちた。

痛みと恐怖で涙が止まらない。

座つていた者は人ではなく、化け物だつた。

みあは自分が死ぬかもしれない、と言葉で思つた。

みあにとつて、死とは薄っぺらい言葉だった。日常で氣に入らない事があれば「死んじ

やえ」と簡単に言えるほど、軽い言葉だ。それがどうだ。今、この瞬間、自分の死を言葉で思つても、みあにとつて言い慣れすぎた言葉は軽さを持ち、自分の死といつ行為さえも軽くなつているような気がする。

自分の言葉で自分が軽い人間のようにに聞こえて、みあは歯噛みした。

(誰が、簡単に死んでやるもんですか!)

みあは自分を奮い立たせるように強く思い。きつと化け物を下から睨んだ。

化け物は、みあのすぐそばまで来て、立ち止まつた。

見下ろしているその表情は赤眼を輝かせている以外、すとん、と抜け落ちているような無表情だが、何をしているのだろうこの食べ物は、と言いたげな雰囲気だった。

化け物に馬鹿にされている。その事に気が付いたみあは、震えも恐怖心もどこかに吹き飛んだ。

いつだって、みあは可愛いみあが一番じゃないと気が済まないのだ。

「み、みあに近付かないでよお。みあに何かしたら、ただじゃおかないんだからねえ！」

左肘を曲げ、自分の体を支えて上半身を浮かせた。そして、右腕を振り上げ、カラカラになつた喉から絞り出すように、化け物に文句を言つ。

不思議そうに眺めていた化け物は、みあの声に触発されたのか、緩慢な動作で腰を屈め、彼女を捕まえようとする。

みあは反射的に目をきつく瞑つた。

ほんの少しだけ化け物が、彼女の柔らかい腕に触れた。

かさついた、まるで、はく製になつた人間のような指の感触。

気持ち悪い！

そう思った刹那、公園に風が吹いた。

「ガハツ」

食道から絞り出されたような声がする。続いて、どさつ、と重たいものが少し離れた場所で落ちる音がした。

みあは音が気になり、恐る恐る目を開く。頸や膝に鈍い痛みが続くが、自分が投げられた訳ではないと分かり、ほっと息を吐き、顔を上げた。

化け物が、何か大きな力に弾かれたように、数メートル先の方で仰向けになつて倒れていた。

みあは 何が起こったのか分からず、大きな目をさらに大きくして、小首を傾げる。

涙に濡れたその表情は幼い子供のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0537v/>

Such is life

2011年8月1日03時26分発行